

Title	代匠記を通じて契沖を思ふ
Author(s)	澤瀉, 久孝
Citation	語文. 1951, 3, p. 21-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68379
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

代匠記を通じて契沖を思ふ

澤 瀉 久 孝

万葉集に於ける万葉集古義を、古事記に於ける古事記伝に相当するものと私はかつて述べた事があり、さう考へる事がまた一般の常識ではないかと思ふが、記伝に相当するものを万葉の方で求めれば、それはむしろ代匠記でないかと今は考へる。否、代匠記は記伝

以上の業績をあげてゐると思ふ。代匠記以後相ついで出た多くの学者の業績を重ねて古義に至つてそれが大成せられたやうに考へられがちであるが、その古義には「契沖云」として代匠記の説をそのままあげたのみで一語をも加へてゐない場合がしばしばある。それもその解以上に出ないものならば、当然の事であるが、他に異説もあり、なほ釈然としないものに対しても無批判にその説をうけ入れてゐる場合がある。たとへば

もとつひとほととますをちゆらしみいまなながむむつとよれは
本人霍公鳥乎八希将見今哉汝来恋乍居者（卷十、一九六二）

を解いて「本人は、契沖、むかし相しれる友をいひ、又昔の妻をも云ことなり、こゝはほととぎすの声を、もとよりきまなれたればむかしの友とおもひて、かく云るなり云々」と契沖の説を長く引用してその説に従つて「昔の友にてある、やよほととぎすよ、汝にあひたしと恋しく思ひつゝ居れば、待しかひありて、めつらしく今来りしや、といふならむか。」と云つてゐる。これは代匠記の説を一步も出でゐない事になる。この歌については別（明日香路昭和廿

五年七月号）に私按を述べておいたが、ともかく代匠記の説は百数十年後の学者に無批判にうけ入れられるだけの力をもつてゐたのである。

つはいぢのちまつちまななるしぢがしなむとてかきよと
海石榴市之八十爾爾立平之結紐乎解卷惜毛（卷十二、二九五二）
この歌を代匠記に

歌の心は、ふたりして結びし紐を、ひとりしてはとかしと、たかひに約したれど、はやく人の心かほりて、ひとり打ときたるにさのみやはわれひとり結びはつへきなれば、今はととかむことのおしきなり。

と云つてゐるが真淵の考には

はじめ君ならではとかじ、と結てし紐をその男今絶たれど、又他男の為に解んは心ゆかぬよし也。

と解し、略解も古義もこれに従ひ井上通泰氏の新考には「男ニ挑マレテ解カムガ惜シ」とさへ述べられてゐる。これは誤解である。紐を解くのを男に逢ふ為とのみ考へるのはひとむきである。他人から挑まれて拒絶するのに「海石榴市」のと語つて「惜しも」は間がぬけてをり、あだし男に逢はうとしてためらひながら「海石榴市の」と説きだすのも與ざめである。

二人して結びし紐を一人して吾は解きみじ直に逢ふまでに

などと詠まれてゐるやうに、二人で結んだ紐を一人で解くのが惜しいのである。代匠記に「人の心かはりて」と云つたのは必ずしも従ひがたいのであるが、(新釈下巻五六、七頁参照)考以下の説は、既に代匠記に正しい解釈が示されてゐるにかゝらず、却つて誤解におちたものである。さうした例が諸注を比較する時、実に屢見出す事が出来る。

我故所云妹高山之岑朝霧過兼鴨(卷十一、二四五五)
を代匠記に

我故人ニトカク云ハレシ妹ハソレニウムシテ高山ノ朝霧ノ晴過ル如ク我ヲ思フ心ヲ過シヤリテモ忘ケムカノ意ナリ。

と云つてゐる。少し云ひ足りないやうにも思ふが、この歌を新考に「過を恒の誤としてイブセケムカモとよむべし」と妄断を下したのは以ての外であり、全釈に「過は死ぬこと」と云ひ、「死ンデンマツタダラウカナア」といふ解釈がなされ、他にもさうした訳の見えるのは皆誤解である。これは「過ぐ」といふ言葉だけを考へて、この場合には適しない他の用語例だけで一律に解釈しようとしたからで、さうした例は

春野爾靈柳咲花之如是成二手爾不逢君可母(卷十、一九〇二)
を解いて、代匠記には

此ハ電ノヤウ／＼立初ルヨリ花ノ盛リニナルマテ久シク相見ヌヨシナリ。

と正解してゐるのを略解や古義に「なる」の語に拘泥して、花が実になる事としてゐるところにも見る事が出来、

波津海乃皇旗雲爾伊理比沙之今夜乃月夜清明已曾卷一、一五)
を代匠記には美しき入日の実景と解いてゐるものを、富士谷御杖の

燈には「さし」と「さす」との区別を強調して入日を「未然」に述べたものとし、古義も「入日の空に心なく雲の棚引よ」と解いてゐるなど全く歌のいのに触れ得ないもので、これらの例はいづれも契沖の卓抜なる解釈力を認めさせるものである。

波爾靈今為妹之浦君見咲見温見著四紐解(卷十一、二六二七)
の作に対する代匠記の

今ハネカツラシテウルハシクウラ若キ妹カマダシメヤカニ由ツカヌサマニテ、或は打咲テ見或ハ温リ見テ、サレト我ニスマハスシテ紐トクカオカシキ由ナルベシ。

と心にくきまでに要を尽した解釈と董蒙抄の
年若き女子なれば、心の定まれるにもあらず。或時は悦び、恨むまじき事をも恨みつくして逢ひもし又隔たりもする事を、きてし紐とくとよせたるなるべし。

といふ、わかつたやうなわからぬやうなことわりごとを較べる時これが阿蘭梨といふいかめしき名を負ひし法師の筆のすざびかと感歎せしめられるのである。

国語学者は時に国語のいの中に触れ得ぬこと今にはじめぬ事ながら、契沖によつてその基礎を定められた歴史のかなつかひは、今敗戦のどさくさまぎれに、一部の国語学者や操觚業者の専断によつて弊履のやうに一度は棄てられた姿であるが、学の自由と文化の尊重と民族の独立とが空題目でないならば、再びわれわれの国語が、我が古典の伝統を正しくうけついで正しい国語にかへる日があるであらう。円珠庵の復興はその事的前提としてのみ意義をもつものだと私は考へてゐる。(右は一月廿六日朝日新聞社講堂に於ける講演の要旨筆記に加筆して按排を改めたものである。四月廿八日記。)